HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	文明論における「始造」と「独立」　―『文明論之概略』とその前後―（一）
Author(s)	松沢, 弘陽
Citation	北大法学論集, 31(3-4下), 347-375
Issue Date	1981-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/16350
Type	bulletin (article)
File Information	31(3-4)2_p347-375.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

論説

文明論における「始造」と「独立」

——『文明論之概略』とその前後——（一）

松沢弘陽

福沢諭吉の思想的生涯を劃する苦心の傑作『文明論之概略』については、すでに多くのことが語られ、さまざまな『文明論之概略』像が描かれて来た。しかしほとんど一つの世界をなしているこの本の広がりと奥深さを考えれば、踏み残された領域はまだ広く、さまざまなルートからの探究が求められているといわねばならないだろう。

第一に、この本のテクストとしての読解自体決して容易ではない。行論の配線は周到に張り廻らされ、回路が巧みに完成しているかと思うと意外な所でと切れている。意図的か否か、簡単に述べられたことばがその背景にどのような事実を持っているのか、その事実はどれだけの意味を持っているのか、もはっきりしない。次第に進んで来た、西欧の著作の福沢への〈影響〉を跡づける作業、とくに手沢本の点検についても同様のことがいえる。[1] また、本書草稿の検討も漸く緒につき、執筆を中断して原書を読み、読んではまた書いたという加筆塗抹縦横の苦心のさまに接することが可能になったが、数次にわたる草稿から成稿にかけての変化が何を意味するか読み取ることはきわめて難しい。[2][3]

この本を読解する作業は最後の所、それが書かれた背景、本書執筆の頃の福沢の世界を理解することと切り離せないだろう。

第二に、しかし本書執筆当時の福沢の世界について、福沢自身が語っている史料はごく少ない。それまで西欧の書物の翻訳編纂を中心として西洋文明紹介のベスト・セラーを次々に世に送って来た福沢が、一八七四年春には「ウカ〳〵いたし居候ては次第にノーレジを狭くするやう可相成」という知的危機を意識し、「最早翻訳に念は無之、当年は百事を止め読書勉強」[4]に専念することを決心した。本書はこの頃起稿されたのだが、やはり、「洋書並に和漢の書を読むこと甚狭」[5]いために苦しみ、書いては読み読んでは書いて成った。本書刊行後において「儒教流の故老に訴へて其賛成を得ること」（「福沢全集諸言」1・六〇頁）にねらいを定めていたと自ら語られていること、本書執筆前後の書簡を通じて、西洋諸国の強圧に次第に危機感を深めその「文明」に幻滅を募らせるにいたっていたことが明らかである。――本書の直接の背景について語られて来たことは以上の程度につきるだろう。これらのことばがそれぞれ何を意味するか、それらはどのように関連しているのか、はそれほど明らかでない。

この点について、小論における関心は二つである。

福沢は、『文明論之概略』の「緒言」で本書の執筆の背景について「紛擾雑駁」「人心の騒乱」について語っている。これらや「脳中に大騒乱」[6]、「マインドの騒動」[7]といった一連のことばは、この時期の福沢の思想の中心にある問題を示しており、云うまでもなく、日本にとって西欧世界との接触の衝撃がもたらした結果を表現していた。そしてこの場合問題なのは、福沢にとってこのような危機をもたらしたものが、西欧の目に見える事物や制度の世界だけでなく、彼が読んで来た、西欧で著された書物の一群であり、これらによってになわれた諸観念とイデオロギーの世界でもあったということである。『文明論之概略』に一歩先立って書かれた『学問のすゝめ』第十編では西洋と日本の間の「智戦」

について語られていた。

福沢における西欧の諸観念やイデオロギーの世界との接触についてこれまでにふれられたことは少なくない。しかし特定の書物を読むという形での接触の具体相についていえば、従来の研究は、原拠本を探し出し、オリジナルと福沢の翻訳・飜案のいわば対応点を見つけ、福沢がオリジナルにいかに「感激的に傾倒」したり「示唆と鼓舞」[8]を受けたか指摘する傾向が一般であった。『文明論之概略』についての場合もそうである。しかし、福沢が読んだ書物はそれぞれに固有の構造をもっている。福沢が〈共感〉したり〈影響〉を受けた点は、その構造の中に位置づけられており、福沢がこれらの構造自体について全く気づかなかったり関心をもたなかったとは思えない。さらに、彼が読んださまざまな書物の間には共通の文化的背景のもとでの所産として、ある程度の相互関連が存在した。福沢は『文明論之概略』を書くためにバックル、ギゾーやミルを読むに先立って、英・米でポピュラーであった書物――大学から小学校までの、また民衆教育用の教科書・啓蒙書類をかなりの数読みこなしていた。そのような接触の上で彼は、バックルの『英国文明史』、ギゾーの『ヨーロッパ文明史』やミルの『自由論』『代議政論』『経済学原理』といった西欧世界の〈大著〉に接したのである。

これら一群の書物が福沢を知的にゆすぶって〈共感〉させたり〈影響〉を与えたことはいうまでもない。しかしこれらの書物がもたらした衝撃は、それに接するものの思想的発展を促す親和的な方向でのものだけではなく敵対的なそれでもあった。見通しを先廻りしていえば、それは、ある場合にはそれを受けいれる側のアイデンティティの危機をもたらすものであり、しかもそのことを必ずしも自覚させぬ態のものであった。『学問のすゝめ』第五編の表現を転用すれば、西欧世界は力や生産力によって受けいれる側の「力を挫」くだけではなく、このように思想によってその「心を奪」い「内を制す」(傍点引用者、以下同様)るものだった。

『文明論之概略』執筆前後の福沢の世界について、小論で注目したい他の一つは、西欧世界の学芸を日本に受容し播布する担い手となった西欧派知識人集団――『文明論之概略』の前後を通じてしばしば論じられた「洋学者」・「改革者」たち――の存在である。福沢が『文明論之概略』によって訴えようとしたという「儒教流の故老」も『文明論之概略』自体の記述の中では「漢学者」として、日本社会において「洋学者」と対偶的な存在として描かれているように思われる。『文明論之概略』執筆の頃から『通俗国権論』『民情一新』『時事小言』の時期にかけてこのような「洋学者」の動向は福沢の関心の中に大きな位置を占めていた。以下、『文明論之概略』中の記述を手がかりとして、本書執筆前後の福沢と同輩「洋学者」グループとの交渉をたどり、その上で、福沢が『文明論之概略』前後を通じて西欧の書物をどう読み、そのイデオロギーにどのように対したか、探ることとしたい。

1

『文明論之概略』第二章冒頭の文章は、本書執筆の頃、日本の知識人が直面した思想的問題の所在――そして小論の主題――を生き生きと描き出している。「今世界の文明を論ずるに、欧羅巴諸国並に亜米利加の合衆国を以て最上の文明国と為し、土耳古、支那、日本等、亜細亜の諸国を以て半開の国と称し、阿非利加及び墺太利亜等を目して野蛮の国と云ひ、此名称を以て世界の通論となし、……」（一六頁。以下『文明論之概略』からの引用は、全集第四巻の頁数のみを示す）。それは欧米を頂点とし、全世界にわたる「文明」civilization の進歩・発達の〈普遍史〉universal history の像である。そこでは世界にわたる諸文明についての、一方文明進歩の諸「段階」―stages―という歴史的観点からと、他方地理的に分布するタイプの比較という観点からとの把握が一体となっていた。立ち入った検討は小論のむすびにゆずる

こととして、このような文明論を、進歩＝比較的文明論と呼ぶことにしよう。[9] 一八世紀のヨーロッパに生れ一九世紀に入ってその盛期を迎えた、このような文明論は一九世紀中葉にはアメリカにも波及し、その影響はポピュラーな世界地理や世界歴史の教科書を通じて英米の社会に広く滲透していた。

福沢と同世代の洋学派知識人は西欧世界との接触と同時にこのような世界文明論の動きにさらされたのだった。福沢の『西洋事情』、中村敬宇の『西国立志編』とともにその影響の大きさから「明治の聖書」と称される内田正雄の『輿地誌略』、福沢の『掌中万国一覧』や『世界国尽』といった、文明開化期の知的雰囲気を醸し出したベストセラーにはいずれもこうした西欧の文明進歩の段階＝比較論の影響が著しかったし、[10] 『文明論之概略』第二章冒頭の文明の三つの「階級」の比較論も、これに先立つ「唐人往来」や『掌中万国一覧』・『世界国尽』のそれを受け継いだ上で発展させたものと思われる。問題は、さまざまな形でさまざまな通路を通り、「洋学者」から始まって日本社会のすみずみまで滲透したこのような文明論、特にその中でのアジア論がどのように受けとめられたかである。

「西洋諸国の人民独り自から文明を誇るのみならず、彼の半開野蛮の人民も、自から此名称の誣ひざるに服し、自から半開野蛮の名に安んじて、敢て自国の有様を誇り西洋諸国の右に出ると思ふ者なし」(同前)。本来ヨーロッパで生れたこの文明論は西欧諸文明を中心に構想され、それの優位性を弁証するものであったが、非西欧圏でこれに接したものもこの文明論の前に精神的に降服したのであった。「啻にこれを思はざるのみならず、稍や事物の理を知る者は、其理を知ること愈深きに従ひ、愈自国の有様を明にし、愈これを明にする従ひ、愈西洋諸国の及ぶ可らざるを悟り、これを患ひ、これを悲しみ、或は彼に学てこれに倣はんとし、或は自から勉めてこれに対立せんとし、亜細亜諸国に於て識者終身の憂は唯此一事に在るが如し」(同前)。「識者終身の憂は唯此事に在るが如し」という一句に福沢は、『文明論之概略』執筆中の自分の思いをもこめていたのではなかろうか。この引用を受けて「半開」段階を説明する一節「今支那の

有様を以て西洋諸国に比すれば之を半開と云はざるを得ず。されども此国を以て南阿非利加の諸国に……」は、草稿では「今日本ノ有様ヲ以テ西洋諸国ニ比スレバ残念ナガラコレヲ半開ト云ハザルヲ得ズサレトモ、我国ヲ以テ南阿非利加ノ……」となっていた。[11] 草稿の文章からは、「半開」というラベルをくやしいけれども許さざるをえぬという、やり切れない思いが伝わって来る。この文章が定稿では西洋の文明とシナの半開の比較論に変っているのである。

このような知的苦境に思い悩む知識人は福沢の身近にことかかなかった。『文明論之概略』を起草した頃、一八八四年四月創刊された『明六雑誌』第一号巻頭の西周の論説「洋宇ヲ以テ国語ヲ書スルノ論」はそのような苦衷の告白、「吾輩日常二三朋友ノ蓋簪ニ於テ偶當時治乱盛衰ノ故、政治得失ノ跡ナト凡テ世故ニ就テ談論爰ニ及フ時ハ、動モスレハカノ欧洲諸国ト比較スルコトノ多カル中ニ、終ニハ彼ノ文明ヲ羨ミ我カ不開化ヲ歎シ、果テ々々ハ人民ノ愚如何トモスルナシト云フ事ニ帰シテ亦欷歔長太息ニ堪サル者アリ」で始まっていた。なかでも、日本の固有のカルチュアの可能性について最も否定的で、さらにそのような評価について最新の〈理論的武装〉をしている点でも、福沢の好敵手として現われたのはおそらく、駐米弁理公使勤務から帰国早々明六社結成のイニシアチブをとった新帰朝者森有礼だったろう。ワシントン在勤中アメリカの当代一流の知識人に近づき、当時アメリカで流行していたスペンサーの「哲学」やミルの「理財学」やトクビルの『アメリカの民主政』に親しみ、[12] 自から図書館を作るべく書物を故国に送った。[13] 森は、帰国の途次ロンドンにスペンサーを訪ねて日本の改革について教えを乞い、「保守的な助言」を受けたのである。[14] その森が日本語の言語としての質についてきわめて低い評価をしていたことはよく知られている。日本語は言語として余りにも貧弱であり近代的なコミュニケーションの用にはとうてい立たぬ、それゆえ英語をもって国語とせよという彼の主張は、ワシントン在勤中一八七三年にはすでに現われていた。七四年初めから同志とともに演説の練習を重ねていた福沢が、その経験にもとづいて明六社でもこの「新法」を試みることを提案した時、他の同人はことごとく懐疑的だった。森有礼

は反対論の先鋒で、その根拠は福沢の伝える所によればやはり「西洋流のスピーチュは西洋語に非ざれば叶はず、日本語は唯談話応対に適するのみ、公衆に向て思ふ所を述ぶ可き性質の語に非ず云々」(「福沢全集緒言」1・五八頁)という日本語認識にあった。[15]

一八七四年一月に刊行された『学問のすゝめ』第四編「学者の職分を論ず」が、明六社同人に投じた波紋もよく知られている。この文章は本来『明六雑誌』に載せられるはずだったものが『学問のすゝめ』シリーズの一編として先に刊行されたらしく、明六社同人を念頭におくこと先ず疑う余地なき「世に名望ある大家先生」を含む、西洋派知識人の政府出仕に対する厳しい批判だった。同年四月刊行の『明六雑誌』第二号全四編は全てこれに対する反論である。[16] 注目に値するのは、福沢の立論がやがて『文明論之概略』で詳しく展開される国民の「気風」論をふまえていること、これに対する反論の中にも文明比較論の影響がうかがわれること、である。その「非学者職分論」で西周は、福沢の「政府は依然たる専制の政府、人民は依然たる無気無力の愚民のみ」という文明開化の裏面についての判断を肯定した上で、「然レトモ如何セン、由来スル所朝夕ノ故ニ非サレハ、之ヲ改メント欲スルモ恐クハ一旦ノ行為ヲ以テ其凱捷ヲ得ヘキニ非ス。夫本邦ノ如キ創ムルニ神教政府ヲ以テシ、……二千五百年間抑圧ト卑屈ト以テ常食トナシタル者ナリ、……今拠カニ日ニ撻テ其楚タラン(ヲ)求ムトモ、鳥ヲ見テ炙ヲ求ムルノ太早計ニ非サルヲ得ヤ、而テ是特ニ本邦ヲ然リトスル耳ナラス、雪山葱嶺ノ東北ニ当リ今古未タ此風習ヲ脱スルノ政府ト人民トアルヲ観ス」とした。この文章の論旨はおそらく、後に引く、再び福沢の「無気力の人民」論にふれた『明六雑誌』第三二号掲載の彼の「国民気風論(ナンオナルケレクトル)」や、同誌三号掲載の民撰議院尚早論「駁旧相公議一題」と密接に関連していた。アジア的専制と停滞という文明比較論がその背景にあり、それと結びついて政府と人民を変える可能性についてのペシミズムが生じているのである。

『文明論之概略』の中にはっきり影を落している福沢と洋学派知識人とのもう一つの、そして最も長く続くことにな

った対立は民撰議院設立をめぐってだった。第五章の一節「世の学者の説に人民の集議は好む可きことなれども無智の人民は気の毒ながら専制の下に立たざるを得ず、故に議事を始るには時を待つ可しと云ふものあり」[17]（七九頁）は民撰議院尚早論を受けたものだろう。一八七四年の民撰議院設立建白に対して、明六社同人は『明六雑誌』第三、四両号にわたってこれを批判し尚早論を唱えた。ここでも小論の関心にとって問題なのは、西周の批判「駁旧相公議一題」にあげられた「抑余聞ク西洋政事ノ学ニ在テハ人民開化ノ度ヲ審カニシ、時ニ適シ地ニ適シ其宜シキヲ制スルニ在ルノミト。是カノ物理（フィジカル）ノ諸学（――文明進歩の度に関係なく普遍的に妥当する）ト本来ノ理法（ロオ）ヲ異ニスル者ナリ。今比シテ之ヲ一ニセムト欲ス、西洋ニ在リテ果シテ其学アリヤ」。といった尚早論主張の根拠である。西周において「西洋政事ノ学」がそのまま、日本における「人民開化ノ度」を測りそこでの政治制度改革の可革の可能性を定める基準となっていることがうかがわれよう。民撰議院設立論はこの後も明六社内で引続き論議の争点となり、特に翌七五年五月一日の定例演説会での加藤弘之・森有礼と福沢の論争においてその頂点に達した。

激しくきり結んだ論争の昂奮が醒めぬかのように、福沢は、翌六月『民間雑誌』に長篇「国権可分の説」[18]を掲げて加藤の立論を逐一詳細に反駁し、さらに七月三一日とどめを刺す形で『郵便報知新聞』に「案外論」（20・一四二―四五頁）を寄せた。日本において「民権の問屋」として振舞いながら民権論の発達を内側からそこねる二大「怪物」の一つ、「洋学者流」についての「西洋諸国を経廻り、西洋諸家に交わり、……啻に衣食住のみならず、或は洋語を用ひ、洋文を読み、洋説を唱へ、洋学をカジり、純然たる洋学先生」（20・一四四頁）という形容が当時もっともよくあてはまるのが、明六社同人特に留学・洋行経験者であったことは明らかだろう。

ここでも重要な批判の一つは「専制独裁の政府」と「無気無力の人民」の停滞、ゆえに議院尚早という判断を支える「西洋諸国を雛形に持出し、内情外形共に寸分も違はざる西洋一流の文明を得んとし」（19・五三〇頁）「雛形に眼を

掩はれ」(19・五三四頁)る意識――西洋における文明進歩のコースを日本におけるそれの唯一のモデルかつ判断基準とし、これに内面的に拘束される――に向けられていた。ここから日本の現実に対するペシミズムと「内情外形共に寸分も違はざる西洋一流の文明を得んとして、坐して事の成行を待」(19・五三〇頁)つ態度が出て来るというのである。さらに民権論の発展を妨げるこの「怪物」の背後にはもう一つの「怪物」、「民権の説はまだ早し、自由の論は開化の度に不似合などゝて、用心らしき説を唱る」(20・一四四頁)在留外国人がいた。福沢によればこうした言説は、「必竟逐円奴が、ためにする所ありて遠廻はしに佞する者に過ぎず。假令或はためにする所あらざるも、日本に在留せる外国人に学者の名称を附す可き者は百中一に過ぎず。假令或は学者先生あるも、三、五年の在留にて日本の事情を知る可き理なし。結局外国人の用心説は取るに足らざるなり」(同前)だったが、「方今我邦の人心はトロリと鎔解して外人に傾きたる世の中なれば、假令譫言妄語にても、髯のはへたる西洋人の口より出れば、或は之に心酔する者なきを期す可らず。案外の禍恐る可きなり」(同前)とされたのである。福沢がこの批判との関連で積極的にとり上げようと模索していたのは、日本と西洋との間の文明「発達」のコースにおける多様性の問題だった。

『文明論之概略』に現われた「洋学者」批判で、福沢と他の明六社同人の間の意見の対立が民撰議院論争のように公然たるものになってはいないが、やはり明六社同人を念頭においたものとして、本書第六章第十章に展開される、彼らの文明化のためのキリスト教導入論への批判がある。これについて一番近いものとして思い出されるのは、『明六雑誌』第三号(一八七四年四月)に寄せられた津田眞道の「開化ヲ進ムル方法ヲ論ズ」であろう。それは人民の進歩が未だ西洋文明の域に至らぬ「東南方(―世界の東方と南方)ノ諸方」において国民の発達を促す原動力を「法教」に求め、政府が西洋人のキリスト教教師を雇って国民教化を行わせよと提案するものだった。中村敬宇の一八七五年二月、明六社での演説「人民ノ性質ヲ改造スル説」[19]の結論もこれに近い。敬宇がかなり早く、七二年に、「擬泰西人上書」[20]を著して

キリスト教の国教化を説いていたことについてはのべるまでもないだろう。

最後に、これまでの批判・対立ほど背景が明らかではないが、明六社同人の言説に関係する可能性があるように思われるものとして、西洋文明との対比における日中文明比較論。福沢は『文明論之概略』第二章「西洋の文明を目的とする事」の執筆の途中、「文明を求めるの順序」を論じ、「天性自ら文明に適する」という人間本性論とそれにもとづいた文明進歩のためのプログラムをのべた所で、「支那と日本との文明異同」についてのそれまでの草稿になかった長い段落を後から挿入している。「或人の説に、支那は独裁政府と雖も尚政府の変革あり、日本は一代万系の風なれば其人民の心も自から固陋ならざる可らずと云ふ者あれども、此説は唯外形の名義に拘泥して事実を察せざるものなり。よく事実の在る所を詳にすれば果して反対を見る可し」と（二五頁）紹介される説は、『明六雑誌』三二号に掲げられた西周の論説「国民気風論（ナシオナルケレクトール）」に通じるように思われる。それは以下のように書き出されている。「余嘗テ欧洲ノ史ヲ読ムニ其中屢々亜細亜風ノ奢侈又亜細亜風ノ専擅等ノ語アルヲ見ル。……中ニ就テ葱嶺以東ハ人種モ異ニシテ又一段ノ区別アルカ如シ。而テ其中又大小数個ニ分ルレハ従テ国民ノ気風モ異ナラサルヲ得ス。然トモ概シテ之ヲ言ハハ所謂専擅ノ風行ハレ、其下ニ立ツ国民ノ気風ハ君ヲ尊ヒ臣ヲ賤スルト云フ秦政カ範囲ヲ出テサルナリ。就中我カ日本国ニ至テハ神武創業以来皇統連綿茲ニ二千五百三十五年君上ヲ奉戴シテ自ラ奴隷視スルハ之ヲ支那ニ比スルニ尤甚シ。況ヤ中世以来天下武臣ノ手ニ落チ封建ノ制ニ変シテ茲ニ殆ト七百年以来……民ノ気魄焉ソ卑屈ナラサルヲ得ムヤ」。

福沢は、「或人」の日中文明比較論に反対して、日本の方が「多事」にして「思想の運動」に富み、それゆえに「西洋の文明を取るに日本は支那よりも易しと云ふ可し」という結論を導き出す。そのような「今の日本」を準備した歴史的条件として福沢が注目したのは武家政権の出現によって「幕政七百年」を通じる「至尊の考」と「至強の考」の二元構造が成立したという事実だった。日本の封建体制に対する批判を動機として筆を執り始めて以来、『文明論之概略』

においても、日本の伝統社会に対する福沢のトーンはラジカルな批判のそれだった。その中でこの一節において異例ともいうべき武家政権再評価論が書き加えられたのは、先に引いた西の日中文明比較論における武家政権論に対応しているのではなかろうか。

他方、西のナショナル・キャラクタ論は、そのテーマや思考様式において、彼がこれに先立って『明六雑誌』に寄せた福沢の学者職分論に対する批判や民撰議院尚早論に通じており、また福沢の学者職分論における「専制の政府」=「無気無力の愚民」論を受けて西の立場からそれの説明を試みるものだった。この論文を載せた『明六雑誌』は、福沢が『文明論之概略』の緒言を記したのと同じ日に出ているが、福沢はこれに先立って何かの形で、西周の西洋・アジアまた日・中の比較文明史論に接したのではなかろうか。[21] 西のナショナル・キャラクタ論が、ここでも西欧産の比較文明史らしきものにもとづいていることは明らかであろう。この中で西はさらに、専制と無気力という日本の「国民気風」を構成するものとして歴史的な「政治上(ポリチカル)并ニ道徳(モラール)上ノ気風」とともに自然条件に属する「地質(ゼオグラフィカル)上ノ気風」をあげていることに注意しておきたい。

『文明論之概略』執筆の前後にかけて、福沢と西欧派知識人特に西欧経験をもち西欧の書物に親しむ明六社同人との間にこのように応酬が行なわれる間に、『明六雑誌』その他に、西洋の文明論の翻訳が現われた。小論の関心から云えば先ず注目に値するのは、同誌第四、五号(一八七四年四月)に連載された「人民ノ自由ト土地ノ気候ト互ニ相関スルノ論」。第七号(仝五月)の「開化ノ進ムハ政府ニ因ラス人民ノ衆論ニ因ルノ説」。訳者は何れも箕作麟祥。前者は「仏国大学士モンテスキュウ所著『スピリット・ヲフ・ロウス』抄」の中、著者モンテスキューの「風土(クリマ)」の理論を集約中にのべた箇所の一つ、第三部の主としてアジア的専政と隷従を扱った第一七篇「政治的奴隷制の法は風土の性質といかに関係するか」全八章の殆んど全体の忠実な訳である。後者は、「バックル氏ノ英国開化史」*History of civilization*

in England 第一巻の中、社会の進歩における宗教、文学と政府の影響を論じた第五章で、穀物法撤法や選挙法改正を例として進歩における政府の役割は第二義的でしかないことを論じた部分[22]である。

ここで注目に値するのは箕作のバックル翻訳について、朗蘆坂谷素が『明六雑誌』一一号に「質疑一則」を寄せて、日本に受容されたバックルの文明進歩の理論は、文明の進歩を目指す主体的な努力に水をさす役割を営むのではないか、としたことである。彼の解する所では、バックルの説は本来「世ノ功ニ矜リ自得スル者及古人所謂苗ヲ助ケ長スル者ノ謬妄ヲ戒ムル為ニ治乱ニ関セス形勢自然ノ跡ニヨリ教ヲ垂レシ者」だった。それが日本に受け容れられると、「開化ノ度イマダ至ラザルヲ口実ニシテ衆説ヲ用ヒズ言陽ニ開テ陰ニ鎖ルノ勢方ニ盛」となり、政府は政府で「施々然トシテ日々開化ノ進ムハ政府ニヨラズ人民ノ衆論ニヨル」とうそぶく、バックルに藉口した状況追随と主体的努力の放棄が現れるだろうというのである。欧米に生れた理論が日本に受容されると却って、文明の進歩や民撰議院開設についての状況追随とサボタージュをもたらすにいたる、というのは、坂谷がこの後も重ねて主張したことだった。

バックルについては、箕作の抄訳に続いて同年の六月と七月、福沢が主宰した『民間雑誌』第二編と第四編にも慶応義塾社中による抄訳が現われた[23]。さらに同年九月には、ギゾーの『ヨーロッパ文明史』の最初の翻訳二種――永峰秀樹の『欧羅巴文明史』第一、二分冊と荒木卓爾・白井政夫訳西周閲『泰西開化史』上巻――が刊行された。福沢が『文明論之概略』第八章末で参照を求めた「文明史の訳書」はおそらくこれらであった。

『文明論之概略』自身の中の記述とそれに関連する出来事に限って見ただけでも、さまざまな争点をめぐる福沢と洋学派知識人たちとの応酬の流れの中に、福沢を含めた彼ら全体の上に一八世紀啓蒙から一九世紀の実証主義の思潮にかけての進歩＝比較文明論、特にそこでの西欧対アジアの文明進歩の比較論が、大きな影を投じ、彼らの心をとらえていること、また文明のタイプの決定因として「気候」(―climat) や「地質学上（ゼオグラヒカル）」の要因が意識されていることがうかが

われよう。そしてさまざまな争点をめぐって、日本における民衆の進歩の段階と改革の見通しについてのペシミズムを語り、受動的・状況追随的な態度をとって福沢と対立した他の「洋学者」たちの態度は、直接間接にこのような西欧の文明論の影響と関係していた。福沢によれば、日本在留の西洋人の日本の文明化についての診断もこのような西洋の文明論と同じ方向に動いていた。『文明論之概略』はこのような背景のもとで着想され執筆されたのである。

2

『文明論之概略』開巻劈頭の一句「文明論とは人の精神発達の議論なり。其趣意は一人の精神発達を論ずるに非ず、天下衆人の精神発達を一体に集めて、其一体の発達を論ずるものなり」は、福沢にとっての当面緊急の課題、そして『文明論之概略』の主題が何であるかを宣言したものといえよう。それは日本という条件のもとでの文明進歩のコースを見通し、そのためのプログラムを構想することだった。「天下衆人の精神発達」を「一体に集めて」――一つの全体に綜合して――とらえるといい、その「衆人の精神」が時と共に「発達」[24]するといい、それまでの日本の思想的伝統にとっても、福沢個人の教養においても全く新しい革命的な観念だった。これがバックルの『英国文明史』に触発されたものであることについてはあらためてのべるまでもないだろう。続く一節はこの知的作業が当時の日本においていかに困難なことがらであるかを語る。

「紛擾雑駁の際に就て條理の紊れざるものを求めんとすることなれば、文明の議論亦難しと云ふ可し」。前半の一節はバックルが『英国文明史』冒頭で同書の目的を明らかにした文章の一節 "discovering regularity in the midst of confusion"[25] に照応するのではなかろうか。福沢にとっては「紛擾雑駁」のただ中で、状況が「紛擾雑駁」であるから

こそその中に「條理の紊れざるもの」、確実なものを発見しようとしたのだった。他方バックルが本書を構想し執筆した英国においても、急速に拡大し変化する世界は confusion そのものだった。その中でバックルは世界が因果法則に支えられた秩序によっておおい尽されていることを信じ、歴史もまた彼にとっては「自然の（ナチュラル）」秩序に支えられたものだった。このような信念にもとづいて彼は、西欧のみならず非西欧の諸文明をも包括した universal history を構想し、文明進歩の諸法則――laws――を発見することによって、歴史学を自然科学を母型とした科学（サイエンス）の域に高めようとした。*History of civilization in England* は普遍（ユニバーサル・ヒストリ）史を書くという本来のプランを、仕事の膨大さを知るにいたって英国文明の歴史に限ることに変更し、しかもその序論の段階で思いがけぬ死によって中断したものだった。

バックルの文明史の背景や問題と福沢のそれとは、それぞれの位相を異にしながら共通する面を有していたのではないか、またそれが福沢をしてバックルに共感させたのではなかろうか。福沢を含めて同世代の洋学派知識人たちは西欧世界とアジア・日本との巨大な規模での衝突がもたらした「紛擾雑駁」の中で、西欧・アジアの中に日本文明のコースを位置づける海図を求めていただろう。全世界に拡大する西欧世界の中心の高みから全世界を鳥瞰しようとする文明史はそれにこたえるものだったろう。その海図をたしかなものにする進歩の諸法則と、それを発見する実証的方法もまた期待を満たすものだったろう。

しかし、洋学派知識人の中でも福沢は、西欧産の文明史を「翻訳」的に受容したのでは、日本にとっての文明論は作れないことをいち早く自覚するにいたっていたように思われる。『文明論之概略』「緒言」において「今の我文明は所謂……無より有に移らんとするものにて……常に之を改進と云ふ可らず、或は始造と称するも亦不可なきが如し」とのべ、第十章で「自国の独立」を論じた表現を転用すれば、福沢は日本において文明を「始造」するための前提の作業として「文明論」を「始造」することを自らの課題としてとりあげ、日本における「文明論」を「始造」するためには西

洋の文明論に拠るのみでなく、それから「独立」せねばならぬことをも自覚していたように思われる。

福沢において、文明論「始造」の企てが他面では知的「独立」を含んでいたことは、既に『文明論之概略』「緒言」の中に示唆されているようである。周知のように、「紛擾雑駁の際に就て」「文明の議論を立て條理の紊れざるものを求めんとするは、学者の事に於て至大至難の課業と云ふ可し」と自覚した知的作業がそれにもかかわらず可能となる根拠を、福沢は「紛擾雑駁」という歴史的状況自体の中に見出した。[26]「今の学者は此困難なる課業に当ると雖ども、爰に亦偶然の僥倖なきに非ず。其次第を云へば、我国開港以来、世の学者は頻に洋学に向ひ、其研究する所固より粗鹵狭隘なりと雖ども、西洋文明の一斑は彷彿として窺ひ得たるが如し。又一方には此学者なるもの、二十年以前は純然たる日本の文明に浴し、啻に其事を聞見したるのみに非ず、現に其事に当て其事を行ふたる者なれば、既往を論ずるに臆測推量の曖昧に陥ること少なくして、直に自己の経験を以て之を西洋の文明に照らすの便利あり」。歴史的激変を背景とした〈一人両身〉〈一身二世〉の世代として自己の「身に得たる」日本と西洋との両文明をつきあわせ、そのことによって両文明いずれの認識も「確実」になるというのである。

この「余輩の正に得て後人の復た得べからざる好機会」は、一方では「後人」――このような文明交替の経験を自己のうちに持たぬ後世代――に対して語られたいわば世代的な「偶然の僥倖」を意味したろう。しかし、「今の学者」の「偶然の僥倖」を述べたくだりは、さらに以下の一節を導いている。「此一事に就ては、彼の西洋の学者が既に体を成したる文明の内に居て他国の有様を推察する者よりも、我学者の経験を以て更に確実なりとせざる可らず」。「彼の西洋の学者が既に体を成したる文明の内に居て他国の有様を推察する」は、先ず、『文明論之概略』の完成まで繰返し参照された「西洋諸家の原書」――世界の文明進歩の中心をなすヨーロッパ文明とりわけ英国文明の高みに立って、「ヨーロッパ外(exterior to Europe)」(バックル)や「アジア」「東洋」(the East)インド、シナといったその周辺を見下

し、自己とそれとを比較したバックル、ギゾーさらにミルの著作――を念頭においていることは確かだろう。それはまた、既に引いた第二章冒頭の欧米＝文明、アジア＝半開、アフリカ・オーストラリア＝未開という、西欧から「世界の文明を論ずる」世界像にも関連していただろう。また、「既に体を成したる文明」が、文明進歩における火から水へ、無から有への、「卒突の変化」＝「始造」段階と対比されていることは先ず確かだろう。そして、「彼の西洋の学者」の非西欧圏認識について云われた「推察」は、「臆測推量」――『文明論之概略』を通じる基本観念の一つ――に関連していたのではないか。

福沢は、西欧の文明の「既に体を成したる」段階から世界を見渡し見下す文明論の、理論としての力を認めていた。文明・半開・野蛮という世界像は、「西洋諸国人民独り自ら文明を誇るのみならず」……「世界の通論にして世界人民の許す所」たらざるをえぬことを認めていた。しかも、「此一事に就ては」――「実験の一事」に関する限り――「彼の西洋の学者」の認識に限界が避けられぬことと、文明「始造」段階のただ中にある日本の知識人の立場の優位とを主張したのだった。「実験」＝「自己の経験」対「推察」というテーマは、『文明論之概略』の終章では「主人自から論ずるの論」対「人のために推量したる客論」という形で再現する。そしてこの状況の中と外からという対立は、文明進歩における段階の差に根をおろしている。このような構造をもった「実験」論は、福沢の文明の世界史論における構造的な要素となった。「彼の西洋の学者」の外からの「推察」に対する〈一身二生〉の「実験」にもとづく批判は、『文明論之概略』本論の中に、どのような形で現われており、またいなかったか。

福沢の「彼の西洋の学者」に対する異議申立ては、西欧とアジアとの「衆心」――「全国人民の気風」を分つ決定的な点についてなされた。『文明論之概略』第九章に於て彼は、「擅権」―「権力偏重」の「気風」が、日本をヨーロッパ

から別つ決定的な「分界」であることを確認する。それは、西欧からの文明論の中でアジアについて古来云われ続けて来たことであり、一九世紀中葉には極めてポピュラーなイメージになっていた。福沢も日本社会における自らの経験にもとづいて、日本についてそれを肯定したのである。しかし問題は何がこのような「擅権」をもたらしたかである。

「今爰に其源因を求めざる可らずと雖ども、其事甚だ難し、西人の著書に亜細亜洲に擅権の行はるゝ原因は、其気候温暖にして土地肥沃なるに由て人口多きに過ぎ、地理山海の險阻洪大なるに由て妄想恐怖の念甚しき等に在りとの説もあれども、此説を取て直に我日本の有様に施し、以て事の不審を断ず可きや、未だ知る可らず。假令ひ之に由て不審を断ずるも、其源因は悉皆天然の事なれば人力を以て之を如何とも可らず」(一四八―四九頁)。

「西人の著書」がバックルの『英国文明史』であり、紹介されたアジア論が第一巻第二章「物理的諸法則が社会組織と個人の性格に及ぼす影響」の中心命題の的確な要約であることはまちがいない。周知のようにバックルは、「物理的諸法則」を構成する要因として気候・食物・土壌・自然相全体(the general aspect of nature)の四つをあげ、アジアを始めとする非西欧世界におけるこれら諸要因の作用を、前三者と最後の自然相との二つに分けて検討する。福沢の紹介における、それぞれ「気候」と「地理山海」との作用についてふれた二つの節は、バックルが「気候」以下の諸要因と「自然相全体」とのそれぞれの作用を扱った、二つの部分の議論の骨子を的確に伝えるものだった。バックルは二グループの要因のいずれについてもインドをもってアジアを代表させる。そこでは高温と土地の肥沃が食物の豊富を、食物の豊富が人口と労働力の過剰と富および権力の不平等をもたらす。かくして「インドでは、奴隷制、恥づべき永遠の奴隷制が、大多数の人にとって自然な状態だった」[27]。さらに、インドの自然相は、そこに生きる者を脅かして「恐怖」(fear)と「迷信」(superstition)で満たす[28]。

福沢は、インドについてのべられたこのような意見を日本に適用して日本における「専擅」の原因を説明出来るか、

判断を留保する（インド自体についてもこのような理解が妥当するか、には思い及ばなかっただろう）。もし説明が出来るとすると、原因が自然条件にあるのだから、専制と隷従という状態は人為では変えられぬことになる。事実バックルは、福沢が紹介したインド論の中でそのことを強調し、先に引いた箇所に直ぐ続けて、「彼ら（――大多数の人）は全く抗し難い物理的諸法則によってこの状態（――「永遠の奴隷制」）にとどまるべく運命づけられている。あの物理的諸法則の力はおよそ克服し難いものだから、それが作用する所では、生産諸階級は永遠の隷従にとどめられてしまう。熱帯の国の記録にとどめられている所では、……人民が彼らに定められたこの運命から脱れたためしはかつてないのである」[29]とのべていた。バックルはさらに続けて、畳みかけるように、「こうした諸国民のもとでは、卑屈な隷従が彼らの歴史をその始めから今日にいたるまで彩ること、またそこにおいても多くの政治的変革は生じたけれども全てが上からであり、下からのためしはなかったこと、宮廷革命や王朝の顚覆、支配者の交替はあったけれども民衆の蜂起や、人民の中から革命はなかったこと、かくして人間よりはむしろ自然が彼らに定めた苛酷な運命がいささかでも和らげられることは未だかつてなかった」[30]という。バックルにおける〈アジア的停滞論〉ということができよう。

福沢は西欧の文明論が指摘する停滞の事実を認めざるをえない。「或る西人の著書に、亜細亜諸洲の諸国にも変革騒乱あるは欧羅巴に異ならずと雖ども、其変乱のために国の文明を進めたることなしとの説あり。蓋し謂れなきに非ざるなり。（政府は新旧交替すれども国勢は変ずることなし）」（一五三頁）。「概して之を評すれば、日本国の人は、尋常の人類に備はるべき一種の運動力を欠て停滞不流の極に沈みたるものと云ふ可し」（一七一頁）。アジアに生きる者が、アジアにおける「専擅」と「停滞」の原因は自然条件にありそれゆえ運命的なものだというこのような見方を受けいれれば、そこに生れるのは自己の文明の進歩についてのペシミズム以外の何ものでもないだろう。

福沢は進んで専制と隷従の原因について、バックルにかわる理解を積極的に打ち出す。「余輩は唯事の成行を説て、

擅権の行はるゝ次第を明にせんと欲するのみ。其次第既に明なれば亦これに応ずるの処置もある可し」(一四九頁)。「擅権」の原因を人間のコントロールしえぬ自然条件にではなく、歴史的条件に求めるのだといえよう。「擅権」発生のプロセスが解明されれば、これに応じる対策をたて、変えてゆくことが可能になるだろう。『文明論之概略』第九章は、この立場に従って書かれた日本における「権力偏重」をもたらした歴史的事情――『文明論之概略』第二章の基本概念の一つを引けば「交際の仕組」――の分析であり、またここで示唆された歴史的な「気風」を支配し変えてゆくことへの関心は、この本全体を一貫して各所にその姿を現わしていた。この意味では、『文明論之概略』全体が、バックルさらに彼を含む「彼の西洋の学者」に対する反論という性格をもっていた。

『文明論之概略』第九章における、「権力偏重」の「気風」の分析が、ギゾーの『ヨーロッパ文明史』によった第八章と表裏一体の関係にあることは云うまでもない。ギゾーの『ヨーロッパ文明史』は、バックルの『英国文明史』に二〇年乃至三〇年先行し、フランスで刊行されながら、共通の知的背景から出たものとしてその関心にはかなり共通する面があった。ヨーロッパと非ヨーロッパ特にアジアの対比という、普遍史的な比較の枠の中でヨーロッパ文明の進歩が論じられ、ヨーロッパ文明の先頭を進むのは、いずれにとっても英国だった。ヨーロッパの進歩と自由がアジアの停滞や専制との対比において論じられ、そのようなアジアの例証としてインド、ごくまれに中国があげられることも共通している。歴史を少数の個人の歴史から解放し、概括的把握を導入した点でも似ている。[31] しかし、ギゾーの『ヨーロッパ文明史』は文明進歩の歴史へのアプローチの一点でバックルと大きく異っていた。バックルが、とくに文明未発達の段階の社会について、社会組織や個人の性格を自然条件から説明したのに対して、ギゾーは、歴史を動かすものとして、人間の観念を重視し、また個人のあり方をそれぞれの段階の社会構造の特質から説明しようとした。[32] ギゾーの場合には、説明のかぎが、自然にではなく人間の観念と人間の結合の型という歴史的な要因にあることは明らかだろう。福沢がバ

ックルと格闘する中でギゾーに強い共感を示すにいたったのはこのような事情のもとにおいてではなかろうか。

「擅権」や「権力偏重」が歴史的に生じたものであれば、それを変えることが可能であり、変える方法を発見することが求められる。福沢が日本における「擅権」と停滞という過去に縛られつつも文明進歩の可能性を構想した、その出発点にあったのは人間本性論だった。「抑も人生の働には際限ある可らず。……天性自から文明に適するものなれば……」(二二頁)。「人生の自から文明に適する所以にして、蓋し偶然には非ず。之を造物主の深意と云ふも可なり」(二三頁)。「元来人類は相交るを以て其性とす。独歩孤立するときは其才智発生するに由なし。……世間相交り人民相触れ、其交際愈広く其法愈整ふに従て、人情愈和し智識愈開く可し」(三八頁)。これらの文章が同じ一つの事を指し示していることは明らかだろう。第三の文章は『文明論之概略』第三章の文明の定義の中の一節であり、定義全体がギゾーの『ヨーロッパ文明史』第一講の文明本質論を忠実にふまえたものだった。ギゾーはしばしば一定の人間本性論を措定してそこから出発するのであり、そのことが、彼の歴史記述の特徴かつ問題点として指摘されているのである。(33)

他方福沢においても、『西洋事情初編』に始まり『学問のすゝめ』『文明論之概略』に至る初期の著作においては人間本性論が重要な位置を占めていた。そして、『西洋事情』から『学問のすゝめ』にかけて、チェムバース社刊行の *Political economy, for use in schools, and for private instruction* やF・ウェイランドの *Elements of moral science* の影響のもとに、展開された人間本性論は、天賦の自由と権利の主体としての個人を基礎づけていた。『文明論之概略』では一転して、福沢の表現を借りれば「交際」を取り結ぶ存在、「交際」することによって文明を進めるべく定められた存在としての人間の本性が現われる。バックルも人間間の、また国家間の「接触(コンタクト)」という事実を文明の進歩一側面として重視しているが、(34) 人間本性論は追放してしまっている。『文明論之概略』におけるこのような人間本性論には、やはりギゾーの影響が大きいと云うべきだろう。(35)

人間本性は文明の進歩の担い手たるべく定められている。日本の「権力偏重」の「気風」も変えることが出来る、という主張は、先に見た福沢のバックル批判の中に既に示唆されていたように、人力で動かすことの出来ぬ「天然」と人力が動かせる「人為」との関係についての議論に連っており、そこにさらに「人為」の特殊な形としての「習慣」についての議論が関連していた。単純な「人為」と「天然」とを区別することはまだ容易だろう。しかし「習慣久しきに至れば第二の天然と為」るにいたって事情は変って来る。『文明論之概略』「緒言」冒頭の文章は文明論の内容について「天下衆人の精神発達を一体に集めて、其一体の発達を論ずるものなり」と定義した上、すぐ続けて「人の世に処するには局処の利害得失に掩はれて其所見を誤るもの甚だ多し。習慣の久しきに至ては殆ど天然と人為とを区別す可らず。其天然と思ひしもの、果して習慣なることあり。或は其習慣と認めしもの、却て天然なることなきに非ず。」(三頁)とのべている。これが「文明の議論亦難し」という困難の理由の一つなのである。

福沢は「一体」としての「衆人の精神」ないし一国の「気風」と「習慣」との関係についてはっきりした説明をしてはいないが、「洽く一国人民の間に浸潤して広く全国の事跡に顕はるゝ」ものとしての「衆心」や「気風」が「習慣」と重なり合う観念であることは、『文明論之概略』全体の行論から見て明らかである。そして「習慣」という観念が、ことばとして明瞭に押し出されて来るのは、日本の「気風」をいかに変え突破してゆくか、「権力偏重」がもたらした「気象」と「勇力」の欠如という具体的なイシューについて具体的な方策をとりあげる箇所においてだった。「其気象なく勇力なきは、天然の欠点に非ず、習慣に由て失ふたるものなれば、之を恢復するの法も亦習慣に由らざれば叶ふ可らず。習慣を変ずること大切なりと云ふ可し」(八一頁)。「天然の欠点」ではないから「人力を以て之を如何ともす可らず」とするには及ばぬ。既に見た文明の後進性と人民の無智を理由に民撰議院尚早を主張する洋学派知識人に対する批判は、この「習慣」の変革論の中で取り上げられたのである。[36] しかし、「習慣」は「第二の天然」であるからそれを変

えるにも相応の方法をとらねばならない。「全国人民の気風を一変するが如きは其事極めて難く、一朝一夕の偶然に由て功を奏す可きに非ず。独り政府の命を以て強ゆ可らず、独り宗門の教を以て説く可らず、況や僅に衣食住居等の物を改革して外より之を導く可けんや」（二一頁）。「此気風は売る可きものに非ず、買ふ可きものに非ず、又人力を以て遽に作る可きものにも非ず」（二〇頁）。「唯其一法は人生の天然に従ひ、害を除き故障を去り、自から人民一般の智徳を発生せしめ、自ら其意見を高尚の域に進ましむるに在るのみ」（二一頁）。

ここには人間の〈自然〉の内発的な〈成長〉の観念がうかがわれよう。別な文脈では「人の智恵は夏の草木の如く一夜の間に成長するものに非ず、假令ひ或は成長することあるも習慣に由て用るに非ざれば功を成し難し。習慣の力は頗る強盛なるものにて、之を養へば其働に際限ある可らず」（七九―八〇頁）とのべられていた。それは、一方、本来「人為」の一種である「習慣」を「天然」と誤認した改革へのペシミズムと、他方、性急な強制やイデオロギーの注入や外からの移植との双方に、はっきりと対立するものだった。福沢が、西欧世界における知性の進歩を論じて、「天然の物に就ては既に其性質を知り又其働きを知り、其性に従て之を御するの定則を発明したるもの甚だ多し、人事に就ても亦斯の如し。人類の性質と働とを推究して漸く其定則を窺ひ、其性と働とに従て之を御するの法を得んとするの勢い進めり」（一三三頁）とのべたのもこのような関連においてであろう。バックルの『英国文明史』も、自然科学の進歩に促されてその成果と方法とを社会と歴史にも適用発展させ、人間行動の法則を発見しようとするものだった。しかし彼の『英国文明史』は発見した法則によってこれまでの歴史を記述し、英国文明の達成した優位の説明を試みるものだったのに対し、福沢の文明論は人間行動の「定則」を知ることによってこれを支配し操作する見通しまでを含む、将来に向っての現状変革のプログラムにわたるものだった。

「擅権」の「気風」や「停滞」は、実は「西人」の決定論的な理解とは異なり、自然条件による不可抗なものではな

いという福沢の主張は、バックル批判として、福沢が明示的にのべる以上のあるいは彼が意識する以上の、意味をもっていた。それはバックルの世界像の根本、『英国文明史』の構成の基本構造にふれるものだった。

本来文明の普遍史として構想された『英国文明史』を貫く世界理解の枠組は、ヨーロッパと非ヨーロッパという二元論だった。『英国文明史』は、一方からの、膨大な史実をこなしたけれどもそれを構成するのに失敗したという批判と、他方からの、歴史について無知な図式倒れという非難との、狭撃にあった。しかし『英国文明史』の中でも全体への序論としての性格の著しい最初の五章についていえば、「システム・メーカー」[37]と呼ばれるにふさわしい明確で堅固な構成がうかがわれる。構成の一つのテーマが、地理的な、ヨーロッパ文明対ヨーロッパ外、諸文明 (the civilizations *exterior* to Europe) と、歴史的な、ヨーロッパ文明対ヨーロッパ前、諸文明 (those civilizations which flourished *anterior* to what may be called the European epoch of the human mind. あるいは the civilizations *anterior* Europe等) (イタリック、引用者) という比較と区別の二元論だった。この二つのカテゴリーの区別対照はさまざまな文脈で繰り返し現われ、行論の細部にまで持ちこまれた二分論は時として不自然な感じを与えさせる態のものだった。

そして『英国文明史』における文明進歩に関するもう一つの重要な、二分論的命題——歴史は自然による人間の変容と人間による自然の変容との二つのプロセスからなり、人間の行動は物理的諸法則と精神的諸法則によって支配される。それ故研究の対象は二種類の法則である——と重なりあっていた。ヨーロッパ外、ヨーロッパ前の文明は自然によって物理的法則を通じて支配され、真に文明の名に値する唯一の文明ヨーロッパ文明は、人間の自然支配を通じる不断の進歩であり、そこには精神的諸法則が作用するというのである。事実『英国文明史』の第一章「物理的諸法則の社会組織と個人の性格に及ぼす影響」は、実質は非ヨーロッパ論である。他方、精神的諸法則とそれを構成する道徳的諸法則と知的諸法則との社会の進歩における作用について論じる第三、四章は、事実上ヨーロッパ論であって、以下に続く

英国、フランス、スペイン、スコットランド諸国における知性進歩の歴史の導入部をなしている。ヨーロッパと非ヨーロッパの対比は第二章の各所で繰り返され、第三章にいたって、「ヨーロッパ文明と非ヨーロッパ文明との巨大な差異は歴史哲学の基礎である」[38]ことを鮮明にした上で、ヨーロッパの非ヨーロッパに対する優越の秘密をさぐることが、本書の課題であることが示される

『文明論之概略』におけるバックルへの論及から推しても、『英国文明史』手沢本への書き込みから見ても、この部分を読んでわが物としていた福沢が、『英国文明史』の行論のこのような構造やバックルの世界像に気づかぬということはまず考えられない。その場合、福沢が、バックルの指摘するアジアの「擅権」や「停滞」という現実は認めつつも、それを自然条件に決定された運命的なものとすることに対して、明瞭かつ首尾一貫した批判を打出したことは、このような世界像そのものに対する批判を含意していたといえよう。さらに、『文明論之概略』第四、五章「一国人民の智徳を論ず」は、『英国文明史』第四章をとって使いこなしたものだった。非ヨーロッパ世界の歴史の研究においては、そこでは人間が自然に働きかけるよりも自然が人間に働きかける方が大きいのだから、最も重要な研究は自然のそれだ、他方ヨーロッパの研究においては、「そこでは自然が比較的力弱く、巨大な進歩の一歩ごとに人間精神は自然の働きに対する支配を拡大していったから、人間の研究が第一義的だ」[39]というバックルに対し、福沢は、日本の歴史をも人間と精神的諸法則からして解明しようとしたのである。そして、一方では既に見たように日本文明の「停滞不流」を認めながら、他方ではそこにも「幸にして人智進歩の定則は自ら世に行はれ」（一六三頁）、「人間の交際に停滞不流の元素を吸入せしめたる」（全前）儒学自体が一面においては、「西洋の語に『リフィインメント』とて人心を鍛錬して清雅ならしむの一事に就ては……功徳亦少しとせず」（全前）とした。refinement は云うまでもなく、西欧における文明論と共に古く、多くの場合 civilized と重なり合う観念であり、この場合はおそらく、バックルからとられてい

る。[40]

福沢もヨーロッパの文明論に共通するヨーロッパの自由・進歩とアジアの「擅権」「停滞」の著しい差異、両者間の文明進歩の段階における巨大な懸隔の事実を認めることから出発したのであり、アジア対ヨーロッパの対比の観念は福沢の問題設定の根本的な枠組だった。彼の場合にも、アジアという観念自体が西欧の著作から初めてえられた。しかし福沢は、アジアとヨーロッパを全く異質な原理によって支配されたものと見、また両者の懸隔を固定した変え難いものとする通念に敢て「疑を容」れた。両者の差異を、人間の「交際の仕組」ないし文明を構成する「元素」の組合せや、あるいは精神的法則の作用のような、両者に共通する要素が形づくるいわばモードの違いによって説明出来ると考え、西欧世界とアジアとの巨大な懸隔を埋めうるものと考えるにいたった。そのような観念は、数年後『民情一新』や『時事小言』にいたってはっきりと姿を現わすのである。

(1) 小沢栄一『近代日本史学史の研究　明治編』一九六八年、伊藤正雄『口訳評注　文明論之概略』一九七二年、に始まり、最近では安西敏三氏の「福沢諭吉における西欧政治思想の摂取とその展開に関する一考察——普遍的人権の原理を中心に——」(『法学研究』第五三巻第二号)等一連の研究。『文明論之概略』における基本概念の一つ「ナショナリチ」がミルの『代議政論』に由来するものであることをつきとめたのも、安西氏の「福沢諭吉とJ・S・ミル『女性の隷従』」(『福沢諭吉年鑑』5、一九七八年)においてである。

(2) 一八七五年四月二四日付島津復生宛書簡。『福沢諭吉全集』17巻一八〇頁。以下本全集からの引用は17・一八〇のように略記する。

(3) 中井信彦・戸沢行夫「『文明論之概略』の自筆草稿について」(『福沢諭吉年鑑』2、一九七五年)が、草稿の全容の検討のこころみの最初のそして現在までもっともまとまったものである。筆者も草稿全体に目を通しているが、その際本論文に負う所が大きかった。

(4) 二月二三日付荘田平五郎宛書簡、17・一六四頁。

（5）（2）に同じ。
（6）『福沢文集第二編』「三田演説第百回の記」4・四七八頁。
（7）一八七四年一〇月一二日付馬場辰猪宛書簡、17・一七五頁。
（8）小沢、前掲、一五六頁。
（9）このようなとらえ方については、J. W. Burrow, *Evolution and society*, 1966, Cambridge, U. P. esp. Chs. 1—4. および R. A. Nisbet, *Social change and history*, Oxford U. P., 1969, esp. Chs. 4—6. に負う。
（10）『輿地誌略』は「サウェージ」「セミバルバリヤン」「ハーフ、シフィライズド」「エンライテント」、『掌中万国一覧』および『世界国尽』「附録」は「渾沌」「蛮野」「未開」又は「半開」、「開化文明」又は「文明開化」の四段階が、諸地域に対応させられており、トルコ、ペルシャや中国を始めアジア諸国は「ハーフシフィライズド」＝「半開」段階に配当されている。『掌中万国一覧』『世界国尽』「附録」の「人種の論」「蛮野文明の別」（2・四六二—六五頁）および「人間の地学」（2・六六三—六七頁）は、挿絵にいたるまで一八六六年の「亜版『ミッチェル』地理書」、*Mitchell's school geography*, 1866. の該当部分に忠実に拠ったものと思われる（『掌中万国一覧』凡例、2・四五六頁照）。右一八六六年版を見ることは出来なかったが慶応義塾で教科書として用いられた *Mitchell's school geography revisededition*、その後の *Mitchell's new school geography* もこの部分は、福沢の両書とよく対応する。
（11）なお、本文引用に続く「近くは我日本上国の人民を以て蝦夷人に比さるときは……」は草稿では「近クハ我本国ノ人民ヲ以テ……」となっていた。なお「上国」「下国」という対概念は、これに先立って「唐人往来」において、文明発展段階の表現として用いられている。
（12）木村匡編『森先生伝』一八九九年、六二—六四頁。なお I. P. Hall, *Mori Arinori*, 1973, pp. 171, 206f., 210, 212. には木村匡の記述を立入って裏付ける検討がある。
（13）木村、前掲、七七—七八頁。
（14）Hall, op. cit., p. 227.
（15）「書生が日本の言語は不便利にして文章も演説も出来ぬゆゑ、英語を使い英文を用るなぞと、取るにも足らぬ馬鹿を云ふ者あり。按ずるに此書生は日本に生れて未だ十分に日本語を用たることなき男らん」という『学問のすゝめ』十七編（一八七六年一

一月刊)のことばもこれに関連するものと思われる。ちなみに森は、明六社の演説がかなり回を重ねるにいたった後にもこれに対して「未タ之ヲ聴クノ後就テ討論批評スルノ段ニ至ラス」という厳しい評価をのべていた(「明六社第一年回役員改選ニ付演説」『明六社雑誌』第三〇号)。

(16) ただ、反論執筆者の一人で明六社同人中政府の中枢に最も近い所にいた森有礼は、参議大久保利通に、「別冊学問ノス、メ四編近来之上出来物ト存シ……有志者之者ハ須ク一読スヘキ一冊子ト存シ候」という添書を付して、この本をすすめている(一八七四年一月七日付、大久保宛書簡。大久保利謙編『森有礼全集』第二巻七七頁)。

(17) この文章で書き出される一節は、最終稿に更に貼紙をして書き加えられている。

(18) 19・五二五頁以下。「近日世に政を談ずる学者の説に曰く」として民選議院設立尚早論を紹介した上批判しており、特定個人の名は現われないが、諸論点全体をこの論争の直後『朝野新聞』(一八七五年五月八日)に寄せられた投書「五月一日明六社会談話筆記」と対照すれば、この文章が、明六社の公開演説における加藤と福沢の論争にもとづくことが一目瞭然である。なおこの投書を始め『朝野新聞』に寄せられた、この論争の反響のひろがりを示す投書四編とこれに対する明六社側の社告一編が、大久保利謙『明六社考』一九七六年、七三頁以下に収められている。なお六月一九日付 *Japan Weekly Mail* も五月一日のこの会についての報道を掲げた(Hall, op. cit., p. 265)。

(19) 『明六雑誌』第三〇号に掲載。

(20) 英文が *Japan Weekly Mail* 一八七二年五月一八日に、漢文の原文は、『新聞雑誌』第五八号、同年八月、に掲載。

(21) 西がこの論文のようなテーマについて明六社で演説したことがあったか否かは、これまでの所では不明である。大久保、前掲書二二頁以下の「明六社演説一覧略表」参照。

(22) *History of civilization in England* (New York, 1873), Vol. 1, pp. 197ff. 福沢の手沢本はロングマン社版第二版をもとにしたアプルトン社版(第一巻は一八七三年版、第二巻は一八七二年版)であり、以下引用はこれによる。なお、この訳文は『日新真事誌』第三周年第二三号(一八七四年五月二九日)に全文転載された。

(23) 中上川彦次郎「英吉利王ジョウジ三世在位中、内国ニ関スル政府ノ所置(英人ボックル氏文明史上巻三百四十九枚ヨリ三百五十二枚マデ撮訳」(第二編、一八七四年六月)、那珂通世「教法論」(英人ボックル氏ノ文明論ヨリ抄訳ス)」(第四編、同年七月)。なお林茂吉「新聞紙ヲ論ズ」(第五編、一八七五年一月)もバックルを紹介している。

(24) 「緒言」に繰返し現われる「発達」ということばは全て後から、おそらく草稿完成の最後の段階で書き加えられたものである。

(25) Buckle, op. cit., p. 5

(26) 参照、丸山真男「近代日本における思想史的方法の形成」(福田歓一編『政治思想における西欧と日本』(下)、一九六一年)。福沢の場合このような「今の一世を過れば決して再び得べからざる」「偶然の僥倖」が明瞭に後の世代に対する関係で主張されたのは、「維新の事情は今日(――一八八〇―八一年の交)三十三、四歳の者にして始めてよくこれを知り、……」(5・一三五頁)と述べた『時事小言』が代表的な例だろう。

(27) Buckle, op. cit., p. 58.

(28) Ibid., pp. 95―105.

(29) Ibid., p. 58.

(30) Ibid..

(31) 福沢の手沢本は、C. S. Henry の英訳 *General history of civilization in Europe.* (New York, Appleton, 1870) である。以下の引照は手沢本による。

(32) cf. Douglas Johnson, *Guizot : Aspects of French history 1787―1874*, 1963, pp. 346f..

(33) Ibid., pp. 350f..

(34) Buckle, op. cit., pp. 110, 159 f..

(35) 『文明論之概略』第三章冒頭の文明の定義は、『ヨーロッパ文明史』第一講、福沢原拠本一八頁の注に拠っており、そこに人間本性論が現われる。

(36) この部分の初めの草稿も「人ノ議論ノ強弱ハ必スシモ其人物ノ智恵ノミニ由ルニ非ス習慣ヲ以テ衆論ノ体裁ヲ成スニ非サレバ其用ヲ為サス」と書き出され、「民会ノ体裁ハ速ニ作ラザル可ラズ。……習慣ヲ養成シテ後日ノ覚悟ヲ為スノミ」とされていた。なお『文明論之概略』脱稿後程ない一八七五年五月一日の演説でも、文明の進歩における習慣の機能について、進歩の阻害という面に限ってだが、論じている。「明治八年五月一日三田集会所発会の祝詞」20・一三四―一三五頁。

(37) Walter E. Houghton, *The Victorian frame of mind*, 1957, p. 165 n. 16. ビクトリア朝の知的雰囲気における「堅さ」(リジディティ)を

扱ったこの部分はバックルのドグマティズムを理解する上で興味深い。ここで、バックルは、ベンサム、コント、スペンサーらと共に「システム・メーカー」として括られている。

(38) Buckle, op. cit., p. 109.

(39) Ibid., p. 110.

(40) Ibid., pp. 33, 66, 92, 170.

一九八〇・一〇・六

（続）

"Creation" of civilization theory in Japan and its "independence" from Western influence

—— A reinterpretation of *Bunmei-ron no gairyaku* (*Outline of civilization theory*) (1)

Hiroaki MATSUZAWA*

Among various interpretations of Fukuzawa Yukichi's *Bunmei-ron no gairyaku,* a monument of Meiji enlightenment, two points seem to be common. Firstly, Fukuzawa's objective in writing this book is to create a theory of civilization in Japan. Secondly, he performs this work under the great influence of Western theory of civilization, especially that of Th. Buckle and F. Guyzot. But such an interpretation of *Bunmei-ron no gairyaku,* in fact, tends to exaggerate some aspects of the book and overlook the others. This author tries to throw light on the so far neglected yet none the less important aspects of the book.

I) Around 1873 and 1874, when Fukuzawa was preparing and writing the book, he had several controversies with his colleagues of the Meirokusha. A close examination of the controversies reveals that central issues of most of them are related to their estimation concerning Japan's capability to modernize itself. Apparently Fukuzawa felt it critical that the Westphile intellectuals were losing confidence in identity and potential ability of their own nation. In fact this crisis of national identity had been caused, to some extent, by the influence of Western civilization theory, which looked down on Asian nations as doomed to be backward. Thus one of the motivations of Fukuzawa's writing *Bunmei-ron no gairyaku* was to

* Professor of Japanese Political Thought, Faculty of Law, University of Hokkaido

strike a balance to the overwhelming influence of Western civilization, particularly that of theory of civilization developed in and imported from the West.

IIa) In his introduction to *Bunmei-ron no gairyaku,* Fukuzawa describes his task in writing this book as "creation" of civilization theory in Japan. Just in this context, he criticises Western theorists who only "guess at Japan far away from inside an already established civilization", because of their misunderstanding of Japan. In Fukuzawa's case, "creation" of civilization theory in Japan actually means its "independence" from the influence of Western theorists of civilization.

IIb) At a few places of the book Fukuzawa explicitly criticises opinions of Western theorists on particular problems of Asian and Japanese culture and institutions. He is especially doubtful of geographical determinism in Buckle's view of Asian backwardness.